



現代ロシ...

アメリカのイラク政策—あまり民主的じゃない政権を民主化したくてやったが思った通りにはならず、悩んでいる。欧米に近いものを作ろうとして北朝鮮に圧力をかけて、変化させようとしたが、全面的に政策転換して、妥協。諦める。
その地域の実情、ありかたを考えずに、欧米の民主主義体制が至上のものと考えてはできない。でも、日本の例から政治的伝統・体制を外側から植えつけることができると考えていて、それ以降アメリカはそれが使命だと考えるようになった。

政治的伝統 1

政治権力のあり方

最近のアメリカ、大学で銃乱射。30人死亡。何で銃規制しないの？政治権力の最後は自分で自分のみを守ること。それは銃で守るってことだ。最終の担保として銃がある。銃ひとつとっても、地域ごとで考え方が違う。ロシアは違うけどね。地域によって考え方が違う。それを頭に入れてね。偏った考え方はよくない。
日本の政治権力、三権分立してるけど、それは世界の常識ではない。世界を見れば、さまざまな形態がある。
政治権力がどういう形で生まれ、どうやって人々に浸透してゆくのか考えることは地域研究の上で有意義である。

中東地域の政治を考えると、イスラムなしで考えられる。この地域では、宗教と政治は切り離せない関係なのだ。イスラムが切り離して考えることができていないなんてのは偏見。欧米化など考えにくい。ではロシアではどうか？
貴族がどうなっていたのか？経済力を持って、1820から経済的影響力を持つ人が政治にも参入、政治権力を持っている人とどういう関係を持っていたのか。

本論

宗教的権威と政治的権力のあり方の関係。

キリスト教会と国王の世俗権力が競合した西ヨーロッパとは異なる。西は教皇がいて世俗の権力に対置することができた。しかし、東ローマ帝国のキリスト教を取り入れたので教皇は存在せず、ロシアの場合には、神の代理人となるのが地上の皇帝がいた。世俗権力を持ったと同時に宗教的権力をも持った存在として始まった。この点で西ヨーロッパとロシアは違う。

13～15Cのタタールのくびきという事件。ジンギスカンのモンゴル勢力にロシア全土が置かれる事件。二百年間、異なる宗教を持った人々というか、そんな存在に支配されていた。そんな中で、人々が信じていたものがキリスト教。そうしていく中でモスクワ公国が生まれてゆくのだ。異宗教からの独立の過程。上納金（宗教のお金）の負担もあったし、自分たちの独立をはたすという共通目的があった。政治権力と宗教的権力は協力し、共生するしかなかった。ここには競合するような余地はなかった。そこで、世俗権力者である皇帝に宗教的権力も与えたのだ。

その後大きな事件。ピョートル大帝、ロシアをヨーロッパに結びつけたことで有名、ロシアでも。しかし、宗教勢力には過激な抑え方をした。宗務院（シノード）の設立、という事件。これ何？これによって宗教的勢力は力を振るえなくなる、世俗権力が勝利を収めた事件。皇帝は神の代理人であるという伝統が追い風になった。政治権力を抑制・規制するというものはロシアにはなかった。ヨーロッパは政治と宗教は互いに干渉しないという取り決めを行っていたが、ロシアは違った。

政治勢力が宗教勢力を圧倒して、その後も脈々といきている。

貴族について。

2. 貴族の状態。「ツァーリ」[雷帝 在位 1533-84]は支配的貴族階級と教会指導部の相当部分の支持を期待することができなくなった。もはや国家を尋常の手段で統治することは不可能であった。だが士族階級の支持なしには、強力な門閥貴族反対派を懲らすことはできなかった。士族の支持を得るには二通りの方法があった。第一の方法は、士族階級の身分制的権利と特権の拡大、士族の改革綱領の実現であった。だが雷帝政府は別の道を選んだ。士族身分全体への依存の道を捨てて、政府は、一部の士族親衛隊から成る特別の警察部隊〔略〕を創設することに決定した。部隊は比較的少数の士族から補充された。」R. スクルインニコフの『イヴァン雷帝』144 ページ

政治権力を握る貴族（支配的貴族階級）と教会指導部を破るには、士族階級の身分制的権利と特権の拡大、氏族の要求を取り入れた改革を実現して、士族の支持を集めるという方法があったが、ツァーリは違った。結局政府は一部の士族からなる特別警察部隊（武装集団）を作り、武力で2勢力を押さえつけた。

雷帝は、これだけで完全な権力を得られたわけではなく、皇族の血が途絶えたとき、貴族が新しい王朝を作らざるを得なくなる。貴族が全国会議を開き、～王朝を発足。全国会議は時々開かれる程度だったので、貴族はそこまで権力は持たず、結局また貴族は権力を抑えられようとするわけだ。

3. 「ピョートルの支配の下では、社会的に上昇するための唯一の経路とは、国家勤務という経路であった。勤務階級に参入することは、実際の物質的・社会心理的特権となった。なぜなら、国家に勤務するメンバーのみが物質的な安全や彼らの財産や人身に対する法的保護を、わずかとはいえ受けいれることができたからである。富それ自体は、勤務と比べればさほど重要ではなかった。ある個人の社会的出自にしても、彼の特権的で指導的な勤務階級への所属や、その内部で上昇する可能性などとの関係では、相対的に重視されることがなかった。社会構造の基礎としての勤務という基準は、官等表の導入によって制度化され、標準化(規範化)された(1722年)。官等表は…19世紀後半にいたるまで帝国ロシアにおける社会的、法的構造のための枠組として役立ってきた。まさにそのことによって国家や君主は、そうした階制的な社会的秩序にたいする絶対的統制を獲得、かつ確保し、その結果、勤務階級のメンバー、すなわち帝国体制のエリートと、彼の意志に服させることになったのである。」マルク＝ラーエフ『ロシア史を読む』41～42

それで、ピョートルの登場。家柄や出自で影響力を持っているのが気に食わない。誰でも国家に勤務しなければならない、というようにして、官等表というものを作る。国家にどれだけ年間で寄与・貢献しているのかを表すのだが、貴族のみならず、いろんな人の記載を認め、あらゆる人を支配下に置こうとした。この結果、社会の中で有能な人物が、国家権力を抑制する・矯正するということができなくなりました。18では工業が発達していなく、富を得るには国家権力に関わるしかない。そこで、官等表をつくり、みんな貢献した人を探るようにしたが、これは社会を弱くする結果となった。社会の中のエリートと全部吸収して、ヨーロッパに追いつこうとしたピョートルの目も重要。

国家への勤務が標準化した、その結果、国家や君主は社会的秩序への絶対的統制を確立し、エリートに対する絶対的統制をも確立した。そうすることで、ヨーロッパ勢力に追いつくのであった。

こうして社会にある政治権力のあり方は、ツァーリに有利に働いていった。

	1800年	1850年	1890年	1920年	1930年	1950年
ロシア	8.5	7.2	12.5	15.0	23.3	39.0
オーストリア	4.4	5.8	32.5	...	...	49.1
イギリス	21.3	39.5	72.1	78.0	80.0	80.5
ドイツ	...	26.5	47.0	62.9	66.0	70.9
アメリカ	3.8	12.0	37.7	51.4	56.2	64.0
フランス	9.5	14.4	37.4	46.7	49.0	54.4
日本	17.0	...	...	18.1	32.0	37.5

前掲佐々木(40)、B.N.Mironov、『ロシア社会史』2、378ページ

経済権力を持つ人々。ロシアの中の都市住民がいかに少ないか。90年以降工業が発達し、都市住民が急増する。産業を豊かにする勢力というのが少ないのがロシアだった。日本では1920～30に産業家たちが影響力を持ってくるが、ロシアは遅いね。

ロシア革命で皇帝権力は壊れる。打ち倒した結果として、三権分立とかチェックアンドバランスなんて考え方自体ロシアでは模索される過程がほとんど存在していなかった。また偏った権力になってしまうのだ・・・